

トマス・アクィナス『神学綱要』Compendium Theologiaeにおける神論②
—第1部第26章～第57章翻訳—

Theology in 'Compendium Theologiae' by Thomas Aquinas, II: Japanese Translation from
Chapter 26 to 57 of Part I

山口隆介

Yamaguchi Ryusuke

要 旨

本稿では「トマス・アクィナス『神学綱要』Compendium Theologiaeにおける神論①」（以下「神論①」）に引き続き、『神学綱要』の翻訳を試みる。「神論①」訳出の第2章から本稿訳出の第35章までは、啓示によらない哲学的思索によっても得られる神理解であるが、第36章では啓示によらなければ得ることのできない神理解とは、神が三位一体であることと述べられ、以下、三位一体の神について論じられる。底本は「神論①」と同じく、Thomas Aquinas, Compendium Theologiae, in: Opuscula Theologica vol.I, Marietti, 1975 を用いた。併せて Thomas von Aquin, Compendium Theologiae, Grundriß der Glaubenslehre, übersetzt von Hans Louis Fäh, Heidelberg, 1963 も参照した。また各章タイトルの末尾の【 】内に『神学大全』における対応箇所を付した。「神論①」と同じく、この対応箇所は Fäh の独羅対訳本に依拠する。

Key Words : 『神学綱要』 Compendium Theologiae 神論 哲学的な神論と啓示に基づく神論の相違

第26章

諸々の名の定義によって神のうちの何かを定義することはできないこと

〔我々が考えることができることとされた3つのことのうち〕2番目のことは、私たちの知性は、諸々の名が神について示した諸概念のいずれによっても、神の本質を完全にはとらえないので、これらの名の定義によって神のうちにあるものが、例えば知恵の定義が神の能力の定義であるとか、他の様々なことについて成り立つ同様のことのように、定義されるということはある得ない。このことはまた他のやり方でも明らかになる。すなわち、定義はすべて類と種とから成るが、本来の意味で定義されるのは種である。そして既に示されたとおり、神の本質はどんな類のもとにも、どんな種のもとにも包み込まれない。それゆえ、彼〔神〕にはいかなる定義もない。

第27章

神と他の諸々のものの名はまったく同名同義的にも まったく同名異義的にも語られていない【ST, I, q.13, a.5】

〔我々が考えることができるのとされた3つのことのうち〕3番目のことは、神と他の諸々の事物について語られた名は、まったく同名同義的にもまったく同名異義的にも語られていないのだが、それは被造物について語られるものの定義は、神について語られるものの定義ではないからである。ちなみに、同名同義的に語られた諸々のものには、同一の定義があるのが必然である。

また同じく、まったく同名異義的〔に語られている〕ということもない。たまたま〔すなわち語そのものの意味によってではなく、用法として〕同名異義的なものの場合、同一の名が1つの事物を意味しながら、〔同時に〕もう1つの事物に関わるということはない。それゆえ、一方によって他方の事物について考えることはできないのである。さて、これら神と他の諸々の事物について語られている名が神に帰せられるのは、〔神が〕それらの事物に対して有する関係に応じてであり、それらの事物について知性はそれらによって表示されたもののことを考えるのである。それゆえ、神について〔神とは〕別の事物によって考えることが我々にはできる。したがって、神と他の諸々の事物については、たまたま同名異義的なものの場合のように、まったく同名異義的に語られることはない。

したがって、それら〔の語〕はアナログアによって、すなわち1つのものに対する「比例」によって語られているのである。というのは、我々は、〔神とは〕別の諸事物を神と、〔神を〕それらの第1の起源として比較し、そうすることで他の諸々のものの完全さを表している、そのような名を神に帰させるのである。このことから明らかなのが、名を付けることに関する限りそのような名は、〔神に帰される〕より被造物について語られているのであり、というのも知性は名を付けることで被造物から神へと昇って行くのであるからなのだが、たとえそうだとしても、名によって表されているものによって、より先なるものによって神は語られているのであって、つまり神から諸々の完全性は他のものに降りて来るのである。

第28章

神は理解するものでなければならないこと【ST, I, q.14, a.1】

さて〔以上のことから〕さらに示されなければならないのは、神は理解するものだということである。というのは既に示されたとおり、彼〔神〕のうちにはあらゆる存在者の完全さがすべて先んじて存在し、あふれ流れ出しているからである。さて、存在するものの完全さすべてのなかでも、まさに理解することこそ卓越しているように思われる。知性ある事物は、他のものすべてより力あるからだ。したがって、神は理解するものでなければならない。

さらにまた、これまでで示されてきたように、神は可能態性の混入のない純粹現実態である。

そして、質料は可能態で存在するものである。ゆえに必然的に、神はまったく質料に関わりがないということになる。そして、質料に関わりがないことが、理解する力を有する原因である。質料あるものの形相が現実態で理解する力を有するようにされるのは、質料から引き出されることで、質料による制約から引き離されることによってであるということが、その〔質料に関わりがないことが、理解する力を有する原因だということの証となる〕印である。したがって神は理解するものである。

さらにまた、既に示されたとおり、神は最初の動かすものである。ところでこのこと〔最初の動かすものであること〕は、知性に固有であると思われる。すなわち、知性は他のすべてを運動のための道具として使用するから。それゆえ、人間もまた、その知性によって、諸々の道具と動物と植物と非生物を使用するのである。したがって、神は最初の動かすものであるので必然的に、理解するものなのである。

第29章

知性は神のうちで、可能態でも、能力態でもなく、 現実態で存在すること【ST, I, q.14, a.7】

さて、既に示されたとおり、神のうちではどんなものであれ可能態では存在せず、現実態でのみ存在するので、必然的に、神が理解するものであることも、可能態でも、能力態でもなく、現実態でのみそうなのである。このことから明らかになるのは、〔神は〕理解の際、いかなる連続も被らないということである。というのは、なんらかの知性が連続のうちで多くのことを理解しているという時は、あるものを現実態で理解している時、別のものを可能態で理解しているということにならざるを得ず、すなわち、同時に存在する諸々のものであればそこには、どんな連続もないからである。したがって、神が何ものも可能態では理解しないなら、それらの理解にはあらゆる連続がないということになる。そこから、なんであれ理解するはたらきをなすものは、すべてを同時に理解するという事、そしてさらに、新しく何かを理解するという事はない。というのは、新しく何かを理解する知性は、まず可能態で理解するものである。それゆえにまた、その〔神の〕知性はあれこれ考えることなしに理解するのでなければならない。つまり、あるものから別のものの思考へ到達するという仕方、例えば、我々の知性が考えている際に被るように〔ではなしに〕。というのは、知性のうちでのこのような〔先に描写したような〕討議は、我々が、既に知っていることから、まだ知らないことを考える、あるいは先立っては現実態では考えていなかったことを考えるに至る時のものである。このようなことは、神の知性では起き得ない。

第30章

神は御自身の本質とは別の形象〔心内形式〕によって 理解するのではないこと【ST, I, q.14, a.2】

ここまで述べられてきたことから、神は御自身の本質とは別の形象によって理解するのではないことが明らかになる。というのは、自分とは別の形象によって理解する知性はすべて、可能態の現実態に対するのと同じ関係で、可知的形象に関わっているからである。というのは、可知的形象は、自身を現実態で理解するものとする完全さだからである。したがって、神のうちには何もかも可能態ででは存在せず、純粹現実態であるなら、必然的に、〔神は御自分の本質とは別の〕形象によってではなく、御自分の形象によって理解するのである。すなわち事物の本質が本当の意味で、かつ直接に赴くのは、本質が属しているものについての思考だけである。すなわち、人間の定義によって本当の意味で人間が認識され、馬の定義によって馬が認識されるのであるから。

したがって神が、その本質によって理解するものであるなら、必然的に、彼〔神〕によって直接に、かつ主として知られているものは、神御自身である。そして、彼〔神〕は御自身の本質であるので、したがって、彼〔神〕においては理解するもの〔神御自身〕と、それによって理解するもの〔形象〕と理解されたものとはまったく同一である。

第31章

神は御自身の理解のはたらきであること【ST, I, q.14, a.4】

また、神御自身が御自身の理解のはたらきであることも必然である。というのは、御自身の理解のはたらきは第2の現実態、すなわち考えるということである（第1の現実態は直知あるいは学知）ので、御自身の理解のはたらきではない知性はすべて、御自身の理解のはたらきに、可能態の現実態に対する関係に関わるからだ。すなわち、可能態と現実態から成る秩序でいつも必ずより先にあるものとは、経過という観点で言えば可能という状態のものであり、そして〔上記の秩序で〕最後のものは、完成した状態のものである。〔では、これから〕一にして同一のものについて語るべきだろう、たとえ様々なものの間では逆になるとしても。すなわち、動かすもの、はたらきかけるものの、動かされているもの、はたらきかけられているものに対する関係は、〔現実〕に〕はたらきかけるものの可能態に対する関係と同じである。しかし、神のうちには、〔神は〕純粹現実態であるので、他のものに対する関係が、可能態の現実態に対する関係と同じであるものはない。したがって必然的に、神御自身が御自身の理解のはたらきであることになる。

さらにまた、知性の理解することに対する関係は、どんな仕方であれ、本質の存在に対する関係と同じである。しかしながら、神は本質によって理解するものであり、またその本質は御自身の存在である。したがって、その〔神の〕知性は御自身の理解のはたらきである。かくてまた、理解するものであるがゆえに、いかなる複合もその〔神の〕うちには置かれませんが、それはその

〔神の〕うちでは知性と御自身の理解のはたらきと可知的形象とが別ではないからである。そしてこれらは、その〔神の〕本質とも別ではない。

第32章

神は意志するものでなければならないこと【ST, I, q.19, a.1】

さらにまた、神が意志するものでなければならないことも明らかになる。すなわち、彼〔神〕は、既に言われたこと¹から明らかのように、完全な善である御自身を理解しているが、理解された善は必然的に愛される。そして、このことは意志によって起きるので、したがって神が意志するものなのは必然である。

さらにまた、既に示された²とおり、神は最初の動かすものである。そして知性は、どんな場合であれ動かすというものではない。〔それには〕欲求が仲介するものでなければ〔ならない〕。そして、知性に伴い起こる欲求が意志なのであるから、したがって、神は意志するものでなければならない。

第33章

神の意志がそのものとしては必然的に、その〔神の〕知性に他ならないこと

また神の意志がそのものとしては、その〔神の〕知性に他ならないことも明らかになる。すなわち、理解された善は、意志の対象であるので意志を動かし、そして、その〔意志の〕現実態であり、完成態である。そして、既に先立つ箇所でも明らかにされた³ように、神のうちでは、動かすものと動かされるもの、現実態と可能態は別ではない。したがって、神の意志は理解された善そのものであらねばならない。そして、神の知性と神の本質は同一であるので、神の意志は、神の知性および神の本質に他ならない。

さらにまた、優れた諸事物の他の諸々の完全さの間にあって、知性と意志はより高貴な諸事物に見出されることをその印とする。ところで、既に先立つ箇所でも示された⁴ように、事物すべての完全さは神のうちでは一つである。したがって神における知性と意志とは、その本質と同一である。

第34章

神の意志は御自身の意志のはたらきそのものであること

以上を踏まえると、神の意志は神の意志のはたらきそのものであることが明らかになる。すなわち、既に示された⁵とおり、神のうちの意志は、彼〔神〕によって意志せられた善と同一である。そして、このようなことは、意志のはたらきそのものが意志と同一でなければあり得ない。意志

のはたらきそのものは意志せられたもののゆえに意志に内在するからである。

さらにまた、神の意志は、その〔神の〕知性およびその〔神の〕本質と同一である。また神の知性は、御自身の理解のはたらきであり、また本質は、御自身の存在である。したがって、意志は御自身の意志のはたらきでなければならない。そしてそれゆえに、神の意志が単純さと対立しないことも明らかである。

第 35 章

これまで言われてきたことはすべて 1 つの信仰箇条に総括されていること

さて、ここまでで述べてきたことすべてから分かることを、我々はこうまとめることができる。神は一にして、単純であり、完全であり、無限であり、理解するものであり、意志するものである。これらすべては確かに信経に、我々が「一なる全能の神を」信じると宣言する時、短い 1 つの箇条の形で総括されている。すなわち、「神」(Deus) という、theos というギリシア語の名から採られて語られたこの名は、theaste [θεασθαι] という語から言われているのだと思われるが、これは「見る」あるいは「考える」という意味なので、この神の名そのものによって、〔神が〕理解するものであること、そしてその帰結として、意志するものであることは明らかである。また、我々は彼〔神〕を「一なる」というが、そのことで神が複数いるということも、あらゆる意味での複合も排除される。すなわち単に一であるということではなく、単純でなければならない。「全能」と我々が言うと、〔神の〕力が無限であって、それ〔神の力〕から何ものも逃れられないことが示される。このことのうちに、〔神が〕無限であり、完全であることが含まれている。すなわち、事物は〔その〕力で本質を完全に作るからである。

第 36 章

これらすべてを、哲学者たちが想定してきたこと

また、以上、ここまでで神について論じてきたことは、確かに、多くの異教の哲学者によって繊細に考察されてきたことである。これまで述べてきたことについて、彼らの中に間違いを犯したものがままあったとしても、そして彼らの中で真なることを語っていた人たちが、長く苦労の多い探求の後に、これまで述べてきた真理にかろうじて到達できたのである。

また、神についてキリスト教の中で我々に伝えられてきたものには、それ以外の、彼ら〔異教の哲学者たち〕には到達できなかったものがある。このようなものについて我々は、キリスト教の信仰に従い、人間の感性を超えて教えられているのである。また、既に示されたとおりの、神は一であり、単一であるので、そう言いながらも、神は父であり、子であり、聖霊であって、しかもこれら 3 つが 3 つの神ではなく、1 つの神であるということ〔すなわち三位一体の教義〕もあるが、これについても確かに、我々は、我々に可能である限り、考えようと思っている。

第37章

御言葉みことばはどのような意味で神にあるとされているか

ここまでで言われたことからまた、神が御自身を理解され、愛していられ、受けることも受け取られるだろう。さらにまた、理解することと意欲することは、彼〔神〕のうちでは、その〔神の〕存在に他ならない。しかし、神は御自身を理解し、そして理解されたものはすべて理解するもののうちにあるので、したがって神は御自身のうちに、理解されたものが理解するもののうちにあるようにして存在する。また理解されたものは、理解するもののうちにあるがゆえに、ある意味では知性の言葉である。というのは、我々は、知性のうちで内的に把握していることを、外的な言葉で表すからであり、すなわち、アリストテレスによれば、声は知性による印だからである⁶。したがって、神のうちにはその〔神の〕御言葉を置かなければならない。

第38章

御言葉は神のうちでは心に宿したこと〔概念〕⁷と言われること

さて、知性のうちに、内的な言葉として捉えられていることは、普通の言葉遣いでは知性の心に宿したこと〔概念〕と言われる。すなわち、体の話で、うちに宿ったと言うなら、それは、生きている動物の子宮に、男がはたらきかけ、女が受け、生命を与える力によって、〔胎児が〕形作られたということである。それ〔女〕の方に妊娠〔という事態〕が起きるのだが、また、宿ったものそのもの〔子〕は、両方〔父親と母親〕の本性に、種に応じて一致する〔同型の形相である〕という形で関わるのである。さて、知性が把握するものは、理解すべきもの〔理解の対象〕が能動的なものとしてあり、知性が受動的なものとしてあることで、知性において形作られたものである。そして知性によって把握されたものそのものは、知性のうちに実在するものであり、かつ、動かすものである理解すべきものに対しては、それ〔知性によって把握されたもの、すなわち概念〕がある意味でその〔理解すべきものの〕類似物であるので一致し〔同型の形相であり〕、また、受動者としての知性に対しても、理解可能性の領域の存在を有するがゆえに、一致する〔同型の形相である〕。そこからして、知性によって把握されているものは、知性の心に宿したこと〔概念〕と呼んで誤りはない。

第39章

御言葉の御父との関係

さて、以上を踏まえた上で、違いを考えなければならない。知性によって捉えられたことは理解されている事物の類似物であり、その〔理解されている事物の〕種を表象する〔再現する〕も

のであるので、ある意味でその子どもであると思われる。したがって、知性が自分とは違う者を理解する時、理解された事物は、知性のうちに宿った言葉の父としてある。そして、知性そのものは、むしろ母親に似ている。こちら〔知性〕の側で、彼女〔母親〕の身に〔子が〕宿るようなことは起きるからである。しかし、知性が御自身を理解する時、把握された言葉の理解するものに対する関係は、子の父に対する関係と同じである。したがって、我々の、御言葉について語るのは、神が御自身を理解していらっしゃることに応じてであるので、御言葉がその御言葉であるところの神に対して御言葉そのものは、父に対する子の関係にあらねばならない。

第40章

神における誕生の理解の仕方【ST, I, q.27, a.2】

以上を踏まえて、カトリック信仰の規定では、神には御父と御子とがあると宣言するよう我々は教えられている。つまり、「父なる神とその子なる神を信じます」と言われている。そして、御父、御子という名を聞いても誰も、我々の間で父や子と言う時のように肉体的な誕生〔生殖〕を思い浮かべることがないように、天の秘密を啓示された福音書記者ヨハネは、「御子よ」と書く代わりに「御言葉よ」と書いている。理解のはたらきによる誕生を我々が知るために。

第41章

御言葉すなわち御子は父と同一の存在と本質を有していること

さて考えねばならないのは、我々にとって、自然の領域の存在と理解するというはたらきは、互いに別であるので、したがって、我々の知性のうちに宿った言葉は、理解可能性の領域の存在のみを有しており、自然の領域の存在を有する我々の知性とは別の存在だということである。しかし、神のうちでは、存在と理解するはたらきは同一である。したがって神のうちにある神の御言葉は、その〔神の〕御言葉は理解可能性の領域の存在としてありつつ、〔御言葉が〕その御言葉であるところの神と同一の存在を有する。そして、以上のことから必然的に、〔御言葉は〕彼〔神〕と同一の本質および本性を有し、神について言われるすべてのことは、神の御言葉に一致するということになる。

第42章

カトリック信仰が以上のことを教えていること

そしてそれゆえ、カトリック信仰の規定によって我々は、御子が御父と実体を同じくするということを宣言するよう教えられている。こうすることで、2つのこと〔謬見〕が排除される。まず最初に、御父が、また御子が、肉体的な誕生の観点で理解されることがなくなる。子の実体を

父から、どんな仕方でも切り離してしまうとそういうことになり〔そういう理解に行き着き〕、それゆえ、御子は御父と実体を同じくしないことにならざるを得なくなるからである。次いで、御父と御子を、理解可能性の領域での誕生という観点から、すなわち、言葉が我々の精神のうちに宿るようにして、偶有として知性に加わるのであって、その本質に属する実在ではないものとして、我々が理解することがなくなる。

第43章

神のうちでは御言葉には、時間、形象、現実の存在のどの観点でも、 御父との違いがない【ST, I, q.47, a.2】

さて、本質が異なっていないものどもに、形象の違いがあること、時間の違いがあること、そして現実の存在の違いがあることは不可能である。したがって、御言葉は御父と実体を同じくするのだから、必然的に、先に言われたもののいずれも、〔御言葉を〕御父と異ならしめることはない。

まず、時間という観点で異なるということはある得ない。というのは、この御言葉が神のうちに置かれるのは、神が御自身を理解することによってであり、すなわち、その御言葉を理解すべきものとして宿らしめることによってであるので、必然的に、いつであれ神に御言葉がない時があったとしたら、神は御自身をその時理解していなかったということになる。しかし、神は、存在してきたその間常に、御自身を理解していっしょだった。というのは、その〔神の〕理解のはたらきは、その〔神の〕存在だからである。したがって、その御言葉もまた常にあった。そしてそれゆえ、カトリック信仰の規定のもとに我々はこう言う。「父から、すべての時代に先立って生まれた」と。

形象の観点からも、神の御言葉が神と、〔御言葉が知性に包含されるがゆえに〕より小なるものとして異なっていることは不可能である。神が御自身を、あるがままより小さく理解することはないからだ。ところで、御言葉は完全なる形象を有している。というのは、〔御言葉が〕その御言葉であるものは、完全に理解されているからである。したがって、神の御言葉は、形象という観点でまったく完全に神性を有しているのが必然である。

また、〔自分とは〕別のものから生じるものどもが、〔自分が〕そこから生じるものどもの形象を完全に〔そのまま〕現実化することがないのは明らかである。1つの例を挙げると、すなわち、〔これまで言われてきた誕生〔生殖〕という語とは〕同名異義の誕生〔生殖〕の場合だが、太陽から太陽は生まれず、ある動物が生まれるのである。したがって、そのような不完全さが、神の誕生からは排除されるように、我々は「神は神から」生まれたと宣言するのである。別の例を挙げると、何かから生じるものが、純粋さを欠いたために〔元のものとは〕異なるものになるということがある。すなわち、それ自身としては単一で純粋なものから、外的質料に付加がなされることによって何か最初の形象あるいは種の本質に欠けているところがあるものが生み出される時

は、大工の精神のうちにある家から、質料のうちにある家が出来た。そして、一定の大きさの物体に受け取られた光から色が生じ、また他の元素が結びついた火から混合体が生じ、また、不透明な物体にさえぎられた光線から影が生ずるように。したがって、このようなことが神における誕生から排除されるように、「光よりの光」と付け加えられているのである。3番目の例を挙げると、何かから生ずるものは、その形象〔種の本質〕を、真理を欠いているために現実化しないということがある。というのは、すなわち、現実の存在を真に受け取るのではなく、ある意味その類似物を受け取るだけだから〔現実化しないということなのだ〕。例えば、鏡に、あるいは彫刻における像のように。またはさらには、知性あるいは感性のうちにある事物の類似物のように。すなわち、人間の像は真の人間とは言われず、類似物と言われる。また哲学者が言う⁸ように、石は靈魂においてなく、石の形象〔種の本質〕が靈魂においてあるのである。したがって、これらが神における誕生から排除されるように、こう付け加えられているのだ。「真の神からの真の神」と。

また現実の存在という観点からも、御言葉が神と異なっていることは不可能である。御自身を理解することは、神にとって自然本性に適っているからである。すなわち、知性はすべて、何かを当たり前理解していることがある。我々の知性に第一原理があるように。したがって、神は、その理解するはたらきがその存在であるので、なおもさらに当たり前御自身を理解する。したがって、その〔神の〕御言葉は本性的にそれ〔神〕に由来するのであり、本性的起源以外から生じるもの、例えば、我々に由来して諸々の人工物が生じるということとは違うのである。これら〔諸々の人工物〕については「生む」ではなく「作る」と我々は言う。しかしながら、本性的に我々から生ずるものを、我々は生まれると言ひ、子〔のようだ〕とするのである。したがって、神の御言葉が本性的に神から生じたのではなく、御自身の意志の力で生じたと理解されることが決してないように、こう付け加えられているのである。「生まれたのであって、作られたのではなかった」と。

第44章

これまで述べてきたことからの結論

したがって、これまで述べてきたことから明らかであるように、先に語った神における誕生のありさまはすべて、御子は御父と実体を同じくすることに関わっているので、それゆえ、すべての後では、全体の総括として、こう締めくくられる。「父と実体を同じくする」と。

第45章

神は御自身のうちに、

愛されるものが愛するもののうちにあるのと同じようにあること

理解されているものが、理解するもののうちに、理解されている部分だけが存在するように、

愛されているものもまた、愛するもののうちに、愛されている部分だけが存在している。というのは、愛するものは、愛されているものに、ある種の内的な運動によって、ある意味動かされているからである。それゆえ、動かすものは動かされているものに接しているので、必然的に、愛されているものは愛するものに対して内的に存在していることになる。また、神は、御自身を理解されるのと同じく必然的に、御自分を愛される。すなわち、理解されている善は、それ自体愛されるものだからである。したがって、神は御自身のうちに、愛されるものが愛するもののうちにあるようにしてある。

第46章

神のうちに愛は霊と呼ばれること【ST, I, q.27, a.4】

また、理解されたものは理解するもののうちにあり、そして愛されるものは愛するもののうちにあるので、何かのうちに存在するという様々な概念が、2つの面〔理解と愛〕に即して考察されねばならない。すなわち、理解するということは、理解するものが理解されるものになんらかの仕方ですることによって起きるので、必然的に、理解されるものは理解するもののうちに、そこにその類似物があるという形で、あることになるからである。また、愛するということは、愛するものの、愛されているものによる、ある意味での運動として起きる。すなわち、愛されているものは愛しているものを、自分の方に引っ張るからである。したがって、愛することは、理解のはたらきが、理解されているものの類似像を完成とするように、愛されているものの類似像を完成とするわけにはいかず、愛するものが愛されているものに引かれ結びつくことで完成するのである。また、主な類似の移し込みは、生物の間で生むものが父、生まれたものが子と名づけられるような同義的な誕生として起きる。同一のもののうちのうちでは第1の運動もまた種によって起きる。それゆえ、神が、理解されているものが理解するもののうちにあるようにして、神のうちに存在するというその様態は、〔3つのペルソナから成る〕神のうちでは、我々が御子、すなわち神の御言葉と呼ぶものによって表現されるのと同じく、神が、愛されているものが愛するもののうちにあるようにして、神のうちに存在するという様態を表現するのに、我々は、そこに霊を、すなわち神の愛を置く。そしてそれゆえ、我々は、カトリック信仰の規定に従って、霊を信じるよう命じられているのである。

第47章

霊は、神のうちに存在するそれは、聖であること【ST, I, q.36, a.1】

また、考えるべきは、愛されている善は目標としての面を有しており、また目標によって、意思の運動のいい悪いが決まるので、必然的に、最高善そのものが愛されているという愛は、これ〔最高善と〕はすなわち神であるので、ある種の卓越した善性を掴んでいることになるが、これ

は聖性という名で表現されるということである。あるいは、ギリシア人たちに倣って純粹という意味で聖なると言われることにもなるが、というのも神のうちにあるのは、あらゆる欠如とは無縁の最も純粹な善性だからである。あるいは聖なるとは、すなわち固いという意味で、ラテン人たちに倣って言われることにもなるが、というのも神のうちに動かすことのできない善性があり、これによって神へ向かう秩序を成しているものはすべて、聖なると言われるのである。例えば、神殿、または神殿の祭具、そして神の礼拝に奉げられたすべてのように。したがって、そのおかげで我々に、神がご自身を愛する愛が入り込んでくる霊が、聖霊と名付けられるのは相応しいことだ。またそれゆえ、カトリック信仰の規定は、ここまでで語られてきた霊を聖なるものと、「私は聖霊を信じます」と言う時に、呼んでいるのである。

第48章

愛は〔3つのペルソナから成る〕神のうちでは非必然的なものと言われないこと

さて、神の理解するはたらきは御自身の存在であるように、また彼〔神〕の愛するはたらきも同様である。したがって、神は御自身を、なんであれ御自身の本質にとって余計なものによって愛することはなく、御自身の本質によって愛するのである。したがって、神が御自身を、彼〔神〕が御自身のうちに愛するもののうちなる愛されるものとしてあることで、愛しているので、神が愛する神のうちに愛される神であるというのは、偶有的なこととしてではない。愛されている諸事物が、愛している我々のうちに、偶有的にあるように。そうではなくて、神が御自身のうちに、愛されているものが愛するもののうちに実体的に〔すなわち、実体の一部として必然的に〕あるようにしてある。したがって、聖霊御自身は、そこで我々に神の愛が入り込むのだが、神のうちにどのような偶有もなく、実体的にあるものとして、御父と御子と同じく神の本質のうちにある。そしてそれゆえ、カトリック信仰の規定により〔聖霊は〕ともに拝み、そして〔御父および御子と〕同時に崇むべきであることが示されているのである。

第49章

聖霊は父と子とから発出されたこと【ST, I, q.36, a.2】

また、考えるべきは、理解するはたらきは知性の力から発するということである。そして、知性は現実態において考えるがゆえに、それ〔知性〕のうちに理解されているものはある。したがって、理解するもののうちにある、理解されている存在なるものは、知性の理解する力から発する。これは既に言われたとおりである。同様に、愛されているものもまた、〔それは〕現実態で愛されているがゆえに、愛するもののうちにある。また、何かが現実態で愛されているということは、愛するものの愛する力から発し、かつ現実態で理解されている愛すべき善から発する。それゆえ、愛するもののうちにある、愛されているものの存在なるものは、2つのものから発するこ

とになる。すなわち、愛することの始原から、そして、把握された理解すべきもの、すなわち愛すべきものについて〔知性のうちに〕宿った言葉から。

したがって、すでに言われたことから明らかなように、御自身を理解し、御自身を愛される神のうちに御言葉が御子であり、また〔御言葉が〕その御言葉である彼が御言葉の父であるので、必然的に、聖霊は、愛に関わるので、神が御自身のうちで、愛するもののうちにおける愛されているものとしてある限りで、御父から発出し、かつ御子からも発出する。またそれゆえ、信経ではこう言われている。「父と子とから発出する」と。

第50章

神のうちではペルソナが3つであることは本質の一性と対立しないこと【ST, I, q.30, a.1】

さて言われてきたこと⁹をすべてまとめると必然的に、神性のうちにはなんらかの意味での三のようなものを我々は置いているが、これは本質の一性および単一性とは対立しないということになる。というのは、神は、御自身のあるがままにおいて実在し、御自身によって理解されており、愛されているものとしてある、ということは認めなければならないからである。

また別の論だが、以上のことは、神のうちと我々のうちで起きる。すなわち、自分のあるがままだと人間は実体であるが、彼〔人間〕の理解するはたらきと愛するはたらきとは彼〔人間〕の実体ではないので、人間は確かに、そのあるがままで考えられるなら、ある種の自存する事物であるが、その知性だけを見るなら自存する事物ではなく、自存する事物によるある種の志向性である。そして、〔人間が〕それ自身のうちに、愛するもののうちの愛されるものとしてあるという観点でも同様である。それゆえ、人間のうちでは以上のように、ある種の三を考えることができる。すなわち、自分自身のあるがままである人間と、知性のうちにある人間と、愛のうちにある人間と。しかし、これらの三は一ではない。というのは、その〔人間の〕理解のはたらきはその〔人間の〕存在ではなく、愛するはたらきの場合もまた同様だからである。そしてそれら3つのものの1つだけが、自存する事物である。すなわち、それ自身のあるがままである人間である。

しかし、神においては存在と知性のはたらきと愛のはたらきは同一である。したがって、御自身のあるがままの存在としてある神、知性としてある神、そして愛としてある神は一つであり、そうでありながら、それらの一つ一つが自存している〔実体としてある〕。そして、知性あるものとしての自存する諸事物を、ラテン人たちはペルソナと呼び習わしていたが、一方ギリシア人はヒュポスタシスと呼び習わしていたので、それゆえ神について〔語る時〕ラテン人は3つのペルソナと言い、一方ギリシア人は3つのヒュポスタシスと言う。すなわち、御父と御子と聖霊とを。

第51章

神のうちで3つのペルソナに対立があるように見える理由

しかしながら、これまで述べてきたことから、ある種の対立が生じると思われる。なぜなら、神のうちになんらかの三のようなものが置かれるなら、あらゆる数はなんらかの区別をもたらすので、必然的に神のうちになんらかの差異を置くことになり、それ〔差異〕で3つのものが相互に区別されるということになるだろう。またそうなれば、神のうちに最高の単一性はないことになるだろう。すなわち、三が相応しいと言う場合、つまり3つのものが区別されている場合は、必然的にそこに複合があることになり、先の箇所での議論¹⁰と対立する。

さらに、既に示されたとおり、神は一でしかないこと〔一でしかなく三ではあり得ないこと〕が必然なら、また、どんな1つの事物も、それ自身から生ずる、あるいは発することはないとすると、神が生まれている、神が発出しているということは不可能であるように思われる。したがって、神のうちに、父と子、そして発出する聖霊の名を置くことは偽である〔ことになる〕。

第52章

〔以上の〕議論への解答：または、神のうちに関係による区別以外ないこと。

さて、この疑問を解決するためには、こう始めなければならない。現実在が多様であるため、多様な事物のうちには、あるものが他のものから生じ、あるいは発する多様な様態がある。すなわち、生命を欠いている事物の場合は、自ら動くものではなく、外的に動かされ得るのみなので、あるものは別のものから、外的に変化させられるという形で生じる。例えば、火から火が生じ、空気から空気が生じるように。

しかし、生物の場合は、自ら動くことがそれらの属性であって、生むものそのもののうちで生まれる。例えば、動物の子や植物の実のように。また、多様な力と同一物の発出による発出の多様な様態を考えることができる。

すなわち、〔それらの〕力のあるものは、そのはたらきが、質料的である限りでの体にしか及ばない。例えば、植物的靈魂の力についてみればよく分かる。植物的靈魂は栄養、成長、生殖に関わり、この、靈魂の〔最後の〕種類の力〔生殖に関わる力〕によって、生きものたちの中では、それを生んだものと、物的的に区別されながらもなんらかの形で結びついている物的なものだけが生じる。

また、力のあるものは、そのはたらきが、たとえ物体を超えることはないとしても、物体の種〔形象〕には〔物体性を〕脱け出して達する、すなわち質料なしにそれらを受け取る力である。例えば、感性的靈魂のあらゆる力に見られるように。というのは、哲学者が言っている¹¹ように、「感性は諸々の形象を受け取るものだ」からである。しかし、このような力は、〔それぞれ〕なんらかの様態で非質料的に事物の形相を受け取るとは言え、それらを身体の器官なしで受け取っているわけではない。したがって、もしひょっとして、靈魂のこのような力のうちに発出が見られないなら、たとえ、身体の器官の助けがまったくないわけではないとしても、発出するものは、

そこから発出してきた〔元の〕ものと、物的に区別されている物的な何かでも、なんらかの形で結びついている物的な何かでもないが、非物的、非質料的にはなんらかの様態で区別され、結びついているものであるということになる。すなわちこのようにして、諸々の動物のうちで、イメージされた事物のかたどりが発するのである。これら〔かたどり〕は確かにイメージ力のうちに、物体が物体のうちにありようにして存在するのではなく、〔それぞれ〕なんらかの霊的な様態で存在する。またそれゆえ、アウグスティヌスは、イメージを霊的な視覚と呼んでいる¹²。

また、イメージ力のはたらきによっては何も、物的様態では発出ししないなら、このこと〔物的様態では発出ししないということ〕は、知的部分のはたらきによる場合には、〔イメージ力の場合〕より、かなり強力に起きるだろう〔物的様態から遠ざかるだろう〕。これ〔知的部分〕は、そのはたらき〔が実現したもの、現実態としてのはたらき^{わざ}〕業のうちですら身体の器官をまったく必要とせず、その〔知的部分〕のはたらき〔が実現したもの、現実態としてのはたらき^{わざ}〕業はまったく非質料的だからである。というのは、言葉が知性の業^{わざ}として発するのは、語るものの知性そのもののうちに実在するものとしてであり、場所としてその〔知性の〕うちに保持されているものとしてではなく、物体としてそれ〔知性〕から分離されたものとしてでもなく、確かに起源への秩序において〔知性〕そのもののうちに実在するものとしてである。そして、同じことが意志の業^{わざ}として起きる発出にも言える。つまり、すでに言われているように、愛されている事物が愛するもののうちに存在するような仕方^{わざ}で存在しているのである。

たとえ、知性の力と感性の力が、それそのものとして見る限り、植物的靈魂よりも高度〔高貴〕であるとしても、それでも、人間のうちに、あるいは他の動物のうちには、イメージに関わる部分の発出として、あるいは感性的な部分の発出として、何か、当の種の現実在という形で自存するものが発出するのではなく、このこと〔当の種〔形象〕の現実在という形で自存するものが発出すること〕が起きるのは、植物的靈魂のはたらきに即して起きる発出を通してのみ起こるのみである。そしてそれゆえ、このことは、質料と形相とからなる複合体の場合は常に、同一の種に属する個物の多数化は、質料の別に応じて起きるということであることになる。それゆえ、人間の場合と他の動物の場合は、形相と質料から複合されているので、物的な区別によって、種を同じくしながら個体として多数化するのであるが、これ〔物的な区別〕は、植物的靈魂の業^{わざ}に即して見出されるのであって、靈魂の他の業^{わざ}として見出され得ない。また、質料と形相とによる複合体でない諸事物の場合は、形相的区別だけしか見出され得ない。しかし、もし形相が、すなわちそれによって区別がなされるものが、事物の実体であるなら、必然的に、あの〔ここで言われている〕区別は、なんらかの自存する諸事物のものであることになる。しかし、あの形相が事物の実体でないならそうはならないだろう。

したがって、知性すべてに共通のものがあるなら、既に言われていることから明かなように、知性のうちに宿るものはある面では、理解するものである限りでの理解するものから発するのでなければならず、またある面では、その発出によってそれ〔理解するもの〕とは区別されるのでなければならない。例えば、知性の宿し〔概念〕、すなわち理解された志向性、理解する知性とは

区別されるように。また同じく、愛する人の情動は、それによって愛されるものは愛するもののうちにあるので、愛するものである限りでの愛するものの意志から発するのである。

しかし、その理解するはたらきがそのものの存在であるということは神に固有のことなので、必然的に、知性の宿し〔概念〕は、すなわち理解された志向的存在〔志向性は、その〔神の〕実体であるということになり、また、愛するものである神御自身のうちでの情動についても同様である。したがって、〔結論として〕残るのは、神の知性の志向性、すなわちその〔神の〕御言葉が、それ〔御言葉〕を生み出すものと、実体という意味での存在としては区別されず、あるものが別のものから発出しているという観点での存在としてのみ区別されるということである。そして、愛するものであるうちでの愛の情動についても、すなわち聖霊に関わるものについても、同様である。

したがって以上のことから明らかなのは、神の御言葉、すなわち御子が、御父と実体として一であっても差し支えないが、しかし、既に言われた¹³ように、発出という関係に関しては彼〔御父〕と区別されるということである。それゆえ、自分自身からそれと同じものが生じることではなく、発することもないことは明らかである。御子は、御父から発出したという面では、彼〔御父〕とは区別される。そして、同一の論が、御父と御子とに関係していることを踏まえるなら、聖霊についても言えるのである。

第 53 章

**御父と御子と聖霊が区別されている関係は、現実であって、
単なる思考上のものではないこと【ST, I, q.28, a.1】**

さて、御父と御子と聖霊が相互に区別されている関係は、現実の関係であって、単なる思考上のものではない。というのは、そのような関係は思考上のものであって、それが事物として現実には存在しているということを帰結せず、単に把握にされているだけだということを帰結する。例えば、石の左右が現実の関係でなく、思考上の関係としてのみ存在するようなものだ。石に〔利き腕のように能力を側面としての右側と比較的弱い側としての左側を決める決め手となる〕能力が現実にあるわけではなく、石に左側があるというのは、動物〔の体〕に左側があるからという理由でそう把握するものの受容という形でしかあり得ないからだ。しかし、左と右は、動物の場合は、現実の関係である。動物の〔体の〕それぞれ決まった部分で、それぞれの能力が現に見出されるからである。したがって、これまで言われてきた関係、すなわち御父と御子と聖霊が区別される関係が、現実にある神のうちに現実には存在するので、必然的に、これまで言われてきた関係は現実の関係であって、単なる思考上の関係ではないということなる。

第 54 章

このような関係は、偶有として内在するものではないこと【ST, I, q.28, a.2】

そして、[このような関係が] 偶有として内在するということはあり得ない。というのは、ある意味では、その関係から直接帰結するはたらきが神の実体そのものだからであり、またある意味では、すでに示されたとおり、神のうちには偶有があり得ないからである。それゆえ、これまで言われてきた関係が、神のうちで現実存在するなら、必然的に、偶有として内在しているものではなく、実体としてあるものだということになる。また、他のもの場合は偶有として存在するものが、神のうちでは実態として存在し得るのはなぜかということが、これまで論じられてきたことから明らかになった。

第55章

ここまで言われてきた関係は神のうちではペルソナの区別として成り立つこと

したがって、神のうちにある関係は、区別は偶有としてではなく実体としてあるが、あらゆる知性的存在のうちでは実体としてあるものには、ペルソナの区別があるので、必然的に、ここまで言われてきた関係のゆえに、神のうちにはペルソナの区別が成立することになる。したがって、御父と御子と聖霊は、3つのペルソナであり、同じく3つのヒュポスタシスである。ヒュポスタシスという語はなんらかの完成した実体存在を表すからである。

第56章

三より多くのペルソナが神のうちにあるのは不可能であること【ST, I, q.30, a.2】

神のうちでは三より複数のペルソナがあることは不可能である。というのは、神のペルソナが実体の分割によって多数化することはありません、ただ、なんらかの発出関係によってのみ可能であって、しかもどんな発出であってもよいというわけではなく、どんな外的なものにも向けられていないような発出でなければならないからである。すなわち、なんらかの外的なものに向けられていたなら、神性を有することはなかったであろう。そして、神のペルソナあるいはヒュポスタシスであることはできなかっただろう。また、神のうちなる、外に向けられていない発出は、既に言われたことから明らかなように、知性のはたらきとして、すなわち言葉が発するということとしてか、意志のはたらきとして、すなわち愛が発するということとしてか、いずれかでしか受け取れない。したがって、どんな神的ペルソナも、言葉としてか—これを我々は御子と言う—愛としてか—これを我々は聖霊と言う—いずれかとして発出しているのでなければ存在し得ない。

さらに、神はすべてを1つの直観で、御自身の知性を通して把握しているので、また同じく意志の1つのはたらきで、すべてを愛しているのであるから、神のうちでは言葉が複数であることも愛が複数であることも不可能である。したがって、御子は御言葉として発出し、聖霊は愛として発出するなら、神のうちでは子が複数であることも、聖なる霊が複数であることも不可能であ

る。

さらに、完全なものとは、その外には何もないもののことである。したがって本性上、自分の外から何かを受け取るものは、端的な意味で完全なものではない。それゆえに、端的な意味で、そのままで完全なものは、数的に多数化しない。例えば、神、太陽、光、またはそのようなもののように。そして、御子も聖霊も、既に示されたとおり、彼らのいずれも神であるので、端的な意味で完全なものであらねばならない。したがって、子が複数であること、あるいは聖なる霊が複数であることはあり得ない。

以上とは別に、自存する何かをあのものこのものとし、他のものとは区別されたものとするものは、数的に多数化することができない。個物は複数のものについて〔述語として〕語ることができないからである。さて、子性によって御子は「この」神的ペルソナであり、御自身で自存し、他のものから区別されている。あたかも、個体化する諸原理のもとでのソクラテスと「この」人格のように。したがって、個体化する諸原理は、それによってソクラテスが「この」人間であるという原理である限り、1つのものにしか当てはまらないように、子性も神のうちでは1つのものにしか当てはまらない。そして、御父と聖霊との関係についても同じである。したがって、神のうちでは父が複数であること、子が複数であること、聖なる霊が複数であることは、不可能である。

さらに、形相という観点からは1つであるもろもろのものを数的に多数化するのは、質料だけである。例えば、白が多数化するのは、複数の基体のうちにあることによってである。しかし、神のうちには質料はない。したがって、神のうちで種〔形象〕と形相として1つであるものはない。数的な多数化が不可能である。そして、父性と子性と聖霊の発出がこのようなものである。したがって、神のうちでは、複数の部分があること、複数の子や複数の聖なる霊があることは不可能である。

第57章

神のうちなる属性あるいはしについて、 もしくは父のうちには数はいくつあるか【ST, I, q.32, a.3】

以上のようなものは、神のうちにペルソナの数だけ存在するだろうから、必然的に、ペルソナの諸属性、すなわちそれによって〔ペルソナが〕相互に区別されるものが、ある数だけ存在することになる。それらのうち3つは御父に当てはまる。1つはそれによって、御子からの区別のみがなされる。そしてこれが父性である。別のしるしにによって、〔父は〕2つのものから分けられる。すなわち御子と聖霊から。そして、これは不生である。御父は他のものから発出した神ではないが、御子と聖霊とは他のものから発出しているからである。3つ目は、それによって御父御自身が御子と共に、聖霊から区別される。そしてこれは、共通の息吹と呼ばれている。さて、御父がそれによって聖霊とのみ異なっている属性を示すことはできない。既に示されたとおり、御

父と御子は聖霊にとって唯一の始原だからである。

(付記)

本稿のこの場を借りて、『聖泉論叢』における過去の業績について訂正を行わせていただきたい。『聖泉論叢』22号掲載の拙訳「トマス・アクィナス『「主の祈り」講解』—翻訳のころみ①—」, 「トマス・アクィナス『「主の祈り」講解』—翻訳のころみ②—」, 「トマス・アクィナス『「主の祈り」講解』—翻訳のころみ③—」, および拙訳に註解を施した「トマス・アクィナス『天使祝詞講解』—翻訳と註釈—」において、それぞれ「筆者の知る限り、日本初訳である」旨の記載をしていたが、その後、先行する翻訳が発行されていることを知った。

『「主の祈り」講解』は竹島幸一神父が1975年に翻訳、「霊的生活」というシリーズの第5巻として出版している。『天使祝詞講解』は、1971年に竹島幸一神父が『天使祝詞—通称「アヴェ・マリア」—の解説』というタイトルで出版している。そのほか渡邊吉徳神父が『天使祝詞講解』の純粹の翻訳ではなく、適宜ことばを入れ替えまた補いつつ訳したものを『ロザリオの信心』に収録している。筆者が参照したのは、ろざりよ社による1980年発行の増訂第2版である(さかのぼる版については未読。なお、渡邊神父編訳として同一書名の書籍が1933年に小羊社、1948年にドン・ボスコ社から発行されているが別内容であり、上記訳は収録されていない)。

両先達の訳をあらためて入手し、読んでみたが、「主の祈り」についても「天使祝詞」についても教えられるところ深甚であった。両先達の業績を紹介するとともに、かつての記述をお詫びして訂正するものである。

註

- ¹ 本書第20, 21, 30章
- ² 本書第3章
- ³ 本書第4, 9章
- ⁴ 本書第22, 23章
- ⁵ 本書第33章
- ⁶ 『命題論』第1章
- ⁷ 原語は *conceptio*.
- ⁸ 『靈魂論』第3巻第8章
- ⁹ 本書第37～49章
- ¹⁰ 本書第9章
- ¹¹ 『靈魂論』第2巻第12章
- ¹² 『創世記逐語註解』第12巻第6章および第24章
- ¹³ 本書第41～44, 49章